

びわこ学院大学 令和四年度 学校推薦型選抜（公募推薦）「小論文問題」

次の文章を読み、あなたの考えたことを六〇〇字程度で述べなさい。

そして、さすがにこれだけ長く二つのことをやっていると、それなりに良かったと思えることもある。その一つは、〈自分のいる場はここだけ〉なのだという閉塞感からの自由である。小さな一つの世界だけに閉じこめられる、風通しの悪さからの解放ということである。

会社でも学校でも、所詮は自分のいる場所は狭い空間である。いくら大会社でも、日々の生活空間は、たとえば営業部といった〈部〉、あるいは〈課〉、そしてその一つのグループといったところだろう。メンバーもせいぜい10人くらいが日々の労働仲間である。

その狭い場所に同僚や先輩・上司がいて、ときに評価をされたり、ひどく叱責されたりもする。あるいは仲間から疎んじられたりもする。そんななかで、自分に対しての悪い評価は、全否定の観を呈することが多く、人格のすべてを否定されたように、ひどく落ち込む。

この場所だけしか知らない人間にとっては、ここだけが生きる場。ここで否定されたらほかに逃げ込む場所はない。友人関係では、せいぜい数人の友達との仲間づきあいが、世界のすべてであるかのように勘違いしてしまうと、その中の人間関係、その仲間の評価と好き嫌いだけが〈絶対〉となってしまうと、これまた逃げ場がない。子供たちの自殺の大きな原因がここにある。

そんなことはないのだよ、すぐ横には別の世界があつて、別の涼しい風が吹いているということを、どのように知らしてやることができるか。

私の息子は、中学一年の時に、アメリカから帰ってくることになった。すぐに滋賀県の地元の中学に編入されたのだが、当然のことながら、アメリカの自由な学校生活になってきた息子は、厳しい規則づくめの地方の学校にはなじめない。活発によくしゃべり、思いつくままに好きなことを言っていた少年が、次第に口数がすくなくなり、元気がなくなっていくのが親の目にもはっきり見えた。

そこで私の妻がぜん頑張ったのである。電車で40分ほどの場所にある、別の私立中学の話聞きつけて来た。すぐにその中学に行つて先生と話をし、授業参観などもさせてもらつてすっかり気に入った。二年の時から、その中学に通うことになったが、息子の変わり方は劇的であつた。2週間ほどで、すっかり活発さを取り戻し、馬鹿なことをおもしろがれる元の子にもどつてしまったのである。

特に子供たちのいじめの問題を考えると、この「ここだけがすべてではない」というメッセージの重要性にまわりの大人たちは気づくべきだろう。一つは具体的な「空間」としての別の場所の存在。いまはこのクラスで嫌な奴といつも顔をあわせなければならぬけれど、もし嫌ならいつでも転校したつていいんだよ、とサジェストできるかどうか。

空間的な別の場所のほかに、もう一つ時間的な別の場の存在も大切な要素であろう。小さな閉鎖空間の息苦しさは、これがいつまで続くのかという展望の無さにもよることが多い。あと3か月だけ我慢をすれば、この場所から抜け出せるということがわかつていれば、なんとかその3か月は耐えられるものである。

いまの場所に耐えられずに悲劇的な選択をするのは、将来いつここから抜け出せるかの展望が持てないことによる場合が多い。具体的な時間を示してやれること、その時間は君の人生の長さのなかのほんの一瞬にも近い短さであることを示唆してやれること、そんな時間が運んでくれるであろう別の世界の存在にもまた目を向けさせてやりたいものである。

この場所に君がいるのは、いくつもある可能性のなかの、たまたま選ばれた一つに過ぎないのだと思えること。会社でも学校でも、ここだけしか自分のいられる場はないのだと思つていては窒息してしまうだろう。

（永田和宏『知の体力』新潮社）